大陸浪人とアジア主義
―宮崎滔天を例として―

サストル・グレゴワール

はじめに

アジア主義とは何か。そして大陸浪人とは何か。この二つの疑問を明らかにし、アジア主義と大陸浪人の関係を明確にすることを研究目的とする。大陸浪人達はアジア主義にどのような影響を与えたのだろうか。

アジア主義とは非常に定義しにくい思想である。戦後から、アジア主義がよく日本の帝国主義と同等に見られた事で、思想としての意味を失ってしまったが、1963年に出版された竹内好の『アジア主義』では次のように述べている。

「アジア主義は多義的だが、どれほど多くの定義を集めて分類してみても、機能する形での思想をとらえることはできない。これはアジア主義にかぎらず、ある意味ですべての思想に共通だともいえるが、とくにアジア主義の場合、きわ立ってその特性が強い。」[1]

もちろん、大アジア主義というアジア主義の一つの定義が日本の帝国主義と近いが、竹内好が述べたように、アジア主義はその定義に限らず多義的な思想である。根本的には、日本のアジア主義はアジアに関しての日本観である。日本は欧米列強によって開国させられた事で、国家としての立場を考え直さなければならなくなった。日本とアジアの関係も大きく変わった。

その状態の中で、大陸浪人と呼ばれるアジアのアクティビスト達が直接アジアの国々に挑んだ。大陸浪人達がアジア主義の多義的な状態を表現していると考える。例えば内田良平という黒竜会の創設者は帝国主義者であり、アジアで日本の領土拡張のため活動していた。それに対し、宮崎滔天は中国の独立のため孫文と活動した。この二人の大陸浪人が相反する目的でアジアに入った。

滔天は帝国主義に基づいているアジア主義と違ってアジアの国々の独立の為に孫文と活動する道を歩んだ。滔天がどのようにして大陸浪人になったのかを明らかにし、そして、滔天は他の大陸浪人と比較をする事が目的である。

滔天が受けた影響

宮崎滔天が思想的な特別性を持っていたとしても、大陸浪人としては他の大陸浪人と共通点を持っていたと考える。とくに、明治初代生まれのアクティビストとして。滔天は明治四年熊本藩に（現在熊本県）生まれた。

郷士の家で育ち、武士としての教育を受けた。明治維新によって社会構造が大きく変化したにもかかわらず、多くの明治初代生まれの人は武士の教育に影響されていた。滔天とともに大陸浪人になった者の多くは武家生まれだった。滔天の思想に反対だった大陸浪人の中でも武士の影響は強い。西南戦争と西郷隆盛[2]は頭山満[3]の玄洋社と頭山の弟子であった内田良平の黒竜会にとってとてもかかせない存在だった。

ある程度に、右翼団体にとって、西郷隆盛のもっとも大事な出来事は西南戦争かもしれない。それより重要なのは征韓論の政変だったと思う。外交の問題より国内政治の問題であった征韓論によって大久保利通達が当時日本の政治権力を持つ事になった。

明治43年に日本が朝鮮を併合したと征韓論が終わった間の60年間では、日本は中国と戦争を起こし、ロシアに勝利し、激動の時代であった。そして、国内政治に非常に重要な変化を起こした政治運動が大陸浪人達にも大きい影響を与えた。その運動とは自由民権運動である。

滔天にとって、自由民権運動は大変重要な出来事であった。幼い頃に滔天は兄を亡くした。宮崎八郎[4]は自由民権運動の思想を持って西南戦争に関わって命を落とした。兄の死は悲しみだけではなく、その思想を宮崎家に残した。宮崎家では死んだ八郎を英雄とし、兄が信じていた自由民権運動は宮崎家の思想となり、残された三人の兄弟に教えられた。

特に一番若い滔天は自由民権運動と反政府的思想の中で育てられた。滔天が最初に入学した学校は西南戦争で戦った武士による創設された学校であった。そして、熊本県立高校を途中で退学した滔天は明治18年に大江義塾に入った。大江義塾を運営していた人物は徳富蘇峰[5]だった。義塾を創設した蘇峰の目的は、若者をまだ設立されていなかった国会に入れる事だった。蘇峰は当然自分が信じていた思想を少年たちに教えた。その思想とは自由民権運動の思想であり、滔天はそれを知って大江義塾にやってきた。しかし、一年も

経たない間に滔天は大江義塾から去ることとなった。なぜなら蘇峰との考えが合わなかったためである。

自由民権運動に参加しなかった滔天は別の道を歩むことになったが、自由民権運動の思想は滔天に重要な影響を与えた。滔天にとって、自由民権運動は「人民の権利」と「自由」という二つのイメージを持っていた。他の大陸浪人もそれぞれ自由民権運動に影響された。例えば、玄洋社の頭山満は短期間ではあるが自由民権運動に参加した事があった。

宮崎滔天と同じように、明治生まれの大陸浪人達にとっても武士の教育と自由民権運動の影響はとても強かった。中国に入ってからも、宮崎滔天の活動からはその二つの影響が見られる。彼は孫文にとって、「自由」と「人民の権利」のための一番重要な日本の支援者になった事は間違いない。

滔天とアジア

滔天がアジア、特に中国に注目した一つの理由は宮崎家の三代目の兄弟、宮崎彌蔵[6]の影響がある。彌蔵が若い頃から、アジア問題の解決には中国の独立と中国民衆の自由にあると考えていた。アジアを救うために中国を救い、そして世界を救うという彌蔵の構想は文明戦争に基づいている。アジアを救うとは、欧州によって侵略されているアジアを救うということである。彌蔵にとってアジアは自由と世界平和と言う思想に基づいている。そのため、世界に人民の解放を起こすために、アジア文明の中心とされる中国をまず解放することが彼の計画の最初の目的だった。

彌蔵はその思想を滔天に伝えた。日本で何も功績を残せなかった滔天が彌蔵の思想を自らの思想にした。滔天は「自由」と「人民の権利」を彌蔵の思想に取り入れ、新しいアジア主義的思想を作りあげた。明治25年に滔天の長い活動が始まった。

アジア国々の革命を目的にしたため、滔天は多くのアジア主義者とアジアのアクティビストに出会う機会があった。例えば、明治26年には、金玉均に出会った。金玉均は朝鮮の改進党の指導者であり、甲申政変[7]を起こした人物であった。その政変の失敗によって金玉均は日本に亡命することとなった。日本に滞在し、朝鮮に帰る機会を待っていたが、現実には厳しい状況であった。そのような状況下、金のもとに滔天が訪れたのだった。滔天の計画を聞き、金は彼の意見に賛同し、その面会後、滔天と金は中国へ向かう事を決めた。しかし、彼らが活動を開始する前に、金は上海において暗殺されてしまった。金の暗殺によって滔天の計画は実行不可能となってしまったが、この出会いにより、金の考えも滔天に影響を与えたのであった。

このように滔天のアジアへの道は困難を極めた。例えば、シアムへの移民計画に参加したが、それも結局失敗に終ってしまった。しかし、滔天はその活動をやめようとはしなかった。彌蔵が亡くなった一年後の明治30年に滔天は孫文にあった。しかし、当時の滔天は彌蔵の死によって絶望的な状況にあった。彌蔵は滔天にとって必要な存在であり、兄を亡くした滔天は次に実行すべき行動が分からなくなってしまっていた。

迷っていた滔天は友達にすすめられたように犬養毅[8]に会った。犬養毅に会うことは滔天の反政府的な考え方に反することであったが、犬養毅の助けは重要だった。犬養の支援を得て外務省において中国で仕事をする事になった。滔天の任務とは中国の秘密相識を研究する事であった。滔天の自伝[9]から、彼はその仕事を自分の目的のためだけに請け負ったと言う事が分かる。

此の任務によって日本に帰ると、横浜で孫文と出会った。孫文との出会いから、滔天の本当の大陸浪人としての人生が始まったといえる。

宮崎滔天と言う大陸浪人

孫文に出会った後、宮崎滔天は孫文の活動と秘密組織に重要な立場を得て、孫文と日本の間の連絡係となった。孫文が日本に滞在していた時には、中国の秘密社会からの情報を伝えた。滔天の助けを必要としたのは孫文だけではなく、康有為も必要とした。康が日本へ亡命する事を決めた時も、滔天の助けを求めた。康の亡命が成功した後も、滔天は再びアジアに旅立った。

明治32年にヒリピン独立派の人物が日本に訪れ、孫文にあった。それにより、ヒリピンの兵士に鉄砲が与えられることとなった。孫文はその鉄砲によりヒリピンが独立し、ヒリピンを中国革命の本部として使おうと計画していたが、鉄砲を運んでいた船、布引丸が沈んでしまった。もちろん、滔天は最初からその計画に参加しており、犬養の助けを得て、鉄砲の購入にも関わっていた。

布引き丸が沈んだ後、滔天は孫文の組織と他の中国秘密組織との同盟を結ぶ為に香港にやって来た。滔天は孫文の代わりに、中国の組織同盟を結ぶ事に成功した。その後、日本に帰国した。孫文は反乱を図っており、滔天の助けを求めていた。

反乱の為、滔天達はシンガポールを訪れた。この時期、康有為はシンガポールに滞在していた。滔天達は康に会いに行ったが、面会を断れてしまった。そして、

数日後康有為の疑いで、イギリスの警察によって、滔天とその友人清藤は逮捕されてしまった。六日後釈放され、シンガポールから香港に向かった。しかし、香港に向かう船でイギリスの警察から香港の出入りが禁じられてしまった。シンガポールの事件が香港まで伝わっていたのだ。結局、この反乱は実行できずに失敗してしまった。

日本に帰国後、滔天は大陸浪人として活動をやめてしまったが、死ぬまで、孫文の計画を応援していた。

結論

大陸浪人とアジア主義と言う二つの言葉が宮崎滔天という人物を象徴している。そして、先に述べたように、大陸浪人たちが滔天と同じく幕末の思想と自由民権運動の思想の影響を受けた事は確かである。活動的には比較は出来ないが、滔天と一緒に孫文の中国革命に参加した大陸浪人が多いのではないか。滔天の名と福本日南、清藤こうしちろう、平山周、内田良平まで、リストがまだつづく。全員が滔天と同じ状況にあったことは確かだが。私の研究は宮崎滔天にのみ焦点をあてたものであるが、今後も大陸浪人に関して研究を進めたい。

書誌学

陳徳仁，安井三吉 編，孫文・講演「大アジア主義」資料集：1924年11月日本と中国の岐路　京都，法律文化社，1989.
COOK Harold Francis, Korea's1884 incident: Its background and Kim Ok-Kyun's elusive dream, Taewon publishing, 1972
玄洋社社史編纂会編，玄洋社社史，東京，葦書房，1992, 731p
JANSEN Marius, The Japanese and Sun Yat-sen, (Sun Yat-Sen et les japonais), Harvard University Press, 1954
黒竜会編，東亜先覚志士記伝，原書房，東京，1966，３集
宮崎滔天，三十三年の夢，国光書房，1902.
宮崎滔天，支那革命軍団，明治出版社，1912.
宮崎滔天，宮崎滔天全集，平凡社，1971，５集
大久保利謙，岩倉使節の研究，東京，宗高書房，1976.
SAALER Sven, KOSCHMAN J.Victor, Pan-Asianism in Modern japanese history, London, New-York, Routledge, 2007
竹内好，現代日本思想大系９，アジア主義，東京，筑摩書房，1963.
上村希美雄，宮崎兄弟伝　アジア編上，福岡，葦書房，1994.
上村希美雄，宮崎兄弟伝　アジア編中，福岡，葦書房，1994.
上村希美雄，宮崎兄弟伝　アジア編下，福岡，葦書房，1999.
上村希美雄，宮崎兄弟伝　日本編上，福岡，葦書房，1987.
上村希美雄，宮崎兄弟伝　日本編下，福岡，葦書房，1999.
上村希美雄，宮崎兄弟伝　完結編，福岡，葦書房，2004.
趙軍，大アジア主義と中国，東京，亜紀書房，1997.

注

1　竹内好，現代日本思想大系９，『アジア主義』，筑摩書房，1963，p12
2　1827-1877
3　1855-1944
4　1851-1877
5　1863-1957
6　1867-1896
7　明治17の12月四日
8　1855-1932
9　宮崎滔天，『三十三年の夢』，国光書房，1902.

サストル・グレゴワール／パリ・ディドロ大学　博士課程学生